

KODANSHA



オリジナルドラマCD シナリオブック

百物語

脚本／西尾維新

Illustration／渡辺明夫

オリジナルドラマCD

百^{ヒャク}物^{モノガタリ}語

西尾維新

NISIOISIN





ILLUSTRATION
AKIO WATANABE

BOOKSBOX DESIGN
VEIA

PREPRESS

KODANSHABOX DTP TEAM
(TOPPAN PRINTING CO., LTD.)

CAST

阿良々木暦：神谷浩史

戦場ヶ原ひたぎ：斎藤千和

八九寺真宵：加藤英美里

神原駿河：沢城みゆき

千石撫子：花澤香菜

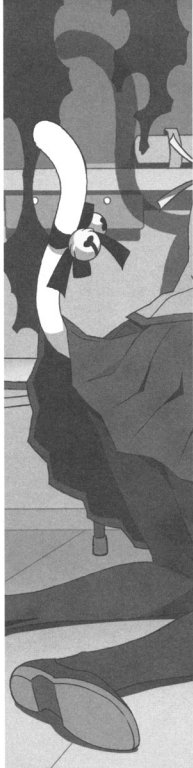
羽川翼：堀江由衣

忍野メメ：櫻井孝宏

忍野忍：平野綾

阿良々木火憐：喜多村英梨

阿良々木月火：井口裕香



オープニング

合唱『思い出のアルバム』

入学試験

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

「僕達の学校って一応地元じゃそこそこ名前の通った進学校だからさ。

入学試験って結構難しかったよな」

「倍率五倍くらいだったけ？ 忘れたけど。地元の賢い子がみんな集まるのよ。ゴミのような阿良々木くんが、よくぞ通ったものよね」

「ゴミのようになって自然に言ったな」

「フルネームなんだっけ？ 阿良々木ゴミ？」

「暦だよ！ ゴミって言われたのもショックだしお前が僕の名前を覚えてないってこともショックだよ！」

「あらそう」

「八九寺だってそんな噛み方しねえよ。あのなあ、戦場ヶ原。忘れられてる設定かもしれないけど、当時の僕はかなりのお利口さんだったんだぜ。ん？ 当時と言えば、入学試験のときってガハラさん、まだこれ蟹

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

に会う前じゃねーの？」

「ええ、そうよ。私学だから試験日程も早かったしね」

「じゃあひねくれて性格が悪くなる前のお前が、あの受験会場にはいたわけだ」

「頭のいい阿良々木くんと性格のいい私が同じ場所に揃っていたというのは、今から思えばなんだか冗談みたいな話よね」

合格発表

阿良々木

「合格発表、見に行けなかったなあ」

戦場ヶ原

「どうして？ 病気でしてたのかしら」

阿良々木

「いや、怖くて。合格ラインギリギリだったし。確か妹に見に行ってもらった覚えがある」

戦場ヶ原

「これ以上ないチキンね」

阿良々木

「しかも月火ちゃんのほう。当時あいつ小学生だったんだけどな。この件に関してだけは、チキンと言われても反論できねーよ。お前は合格発表のとき、どうしてた？」

戦場ヶ原

「普通に見に行ってたわよ。当時の私はスーパー私だったのだから。あ、でもそう言えば、確か羽川さんは阿良々木くんと同じで、合格発表、見に行かなかったって言ってたわね」

阿良々木

「はあ？ あいつが何を怖がるんだ？」

戦場ヶ原
阿良々木

「怖いとかじゃなくて。いつも通り、家で勉強してたんだって」
「……一貫してんなあ」

入学式

阿良々木

羽川翼

阿良々木

「羽川。その頃はまだ知り合ってなかったから憶えてないんだけど、お前ってさあ、入学式の時、新入生代表の挨拶とかしなかったの？」

「してないよー。話はあったけど、悪目立ちしたくなかったから、丁重にお断りしました」

「悪目立ちって……学校側もまさか断られるとは思ってなかっただろうな」

制服

阿良々木

「僕達の高校の制服って普通に学ランセーラーだから、まあ際立った特徴はねーよな」

羽川翼

「最近はブレザーが増えてるから、逆にこのスタンダードさが珍しいみたいだよ。阿良々木くん、学ランが似合うって一部で評判だよな」

阿良々木

「あの台詞噛みがちなツインテールのミニ少女が言ってるだけだろ？ しかもあいつは、学ランが似合うって言ってんじゃなくて、僕には夏服が似合わないって言ってんだよ。普通に悪口じゃねえか」

羽川翼

「そう言えば、阿良々木くんの通ってた中学校の制服って、公立の割には特殊だったよね。女子のワンピースとか、全国的にもあんまないよ」

阿良々木

「うん。実はさ、小学六年生のときの僕って、やっぱそれなりの学力を誇っていたから、私立中学に行かないかって話もあったんだよ」

羽川翼

「ああ。火憐ちゃんや月火ちゃんも私立だしね。阿良々木くんもその道

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

を選ぶ機会は与えられていたわけだ。でもなんで今そんな話するの？」

「まあその、時効ってことで話すけど、公立中学の女子の制服が可愛いっていう理由で、僕は私立受験の話を蹴ったんだよ」

「当時からそんなキャラだったんだ……」

「実は今でも制服姿の千石を見たら胸がドキドキすんぜ」

「本人には黙っときなさい」

クラス分け

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

「私と阿良々木くんって、何気に三年間ずっと同じクラスなのよね」

「話すようになったのは三年生になってからだけどな……それまでは僕は、本当にお前のことは、ただの深窓の令嬢だと思ってたぜ」

「ただの深窓の令嬢というのも相当おかしな言い方よね。ちなみに私、今だから言うけれど、一年二年のときから、阿良々木くんのことを意識していたのよ」

「え、そうなの？ やだ、なんか照れるな」

「阿良々木くんが落ちぶれていく様子を、楽しく観察させてもらってたわ」

「感じ悪っ！」

週休二日

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

「我が校では土曜日も授業があるとわかったときは、かなりびっくりしたものだ」

「進学校ゆえになあ。ハッピーマンデー、ただの二連休だもんな」

「昼までの授業と言うのが新鮮だ」

「半ドンとか言ってたらしいな」

「ところで阿良々木先輩。祝日は一年に何日あるのか、ご存知か？」

「え？ いやごめん、知らない。数えたことねえや。どれくらい？」

「十五日だ」

「うわ。結構あんな。一年のうち二週間以上休めんのか」

「そして日曜日の数が、三百六十五割る七で、ざっくり五十二日くらい。合計すると、一年につき六十七日ほどの休日が、日本国民には約束されているわけだ。そしてこの上、夏休みや冬休みや春休みがある」

阿良々木

「それを聞くと、土曜に休むのは休み過ぎだな」

テスト

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

「テストと言えばこの人でしよう。羽川翼さん、ナイス発言をお願いします」

「何その振り……」

「なんかあるだろ？ テストにかける意気込みとか、羽川独特の哲学とか」

「ケアレスミスって、憧れる」

「ナイス！」

文系・理系

八九寺

「明言はされてませんけれど、阿良々木さん。阿良々木さんって理系な
んですよね」

阿良々木

「え？ ああ、うん。そうだよ。言ってなかったっけ？ 僕と、戦場ヶ
原と、羽川。三人とも理系」

八九寺

「まーそうでもない、戦場ヶ原さんと阿良々木さんが三年間ずっと同
じクラスっておかしいですよ。羽川さんと三年生で同じクラスになれ
たのも、人数の少ない理系クラスにおける必然だったってわけですか。
よかったですねー、阿良々木さん。数学だけはできて」

阿良々木

「神原はどっちだったけなあ」

八九寺

「あのかたは体育会系でしょう」

阿良々木

「お前は明らかに文系だよな」

八九寺

「私はキレー系です」

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

「お前がキレー系だったら僕は草食系だよ」

「阿良々木さん以上の肉食系男子がいますか」

「それ言ったら、神原はあれだぜ。腐食系女子だぜ」

「無駄にうまいですね……」

「文系でもやっていけたかもな」

国語

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

「でもやっぱり国語は苦手だなあ」

「阿良々木さん、数学以外は全部苦手じゃないですか」

「国語が一番苦手だよ。現文はともかく、古典なんかマジで理解不能だ」

「ふうむ。左様ですか」

「そこへいくと、お前は日本語のプロだよな」

「日本語と国語も、また違うものなんですよとね」

数学

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

「暦お兄ちゃんは、どうして数学だけ得意なの？」

「さあ……前世がピタゴラスだったんじゃねえかな」

「そうだね。きっとそうだよ」

「お前は僕に突っ込んでほくれないんだな……」

「前世がピタゴラスかあ。だったら将来はお医者さんだね」

「はは。そりゃいいな」

「じゃあ撫子の前世はナイチンゲール。撫子は看護師さんを目指すよ」

「なにが『じゃあ』なのかさっぱりわからないが……」

社会

羽川翼

「私は阿良々木くんが一番苦手な教科って、国語じゃなくて社会だと思
うんだけど」

阿良々木

「それは何？ 阿良々木暦には社会的常識が欠けているとか、社会不適
合者だとか、そういう意味？」

羽川翼

「違うよ……なんてそんな被害妄想入ってるのよ。普通に暗記科目だか
らだよ。阿良々木くん、暗記が不得意じゃない」

阿良々木

「教科書まるごと憶えてる、お前や戦場ヶ原と同列で語られたら、そり
や僕の記憶力は残念だけとよ」

羽川翼

「んー。まあその気になれば、世界史とか日本史とかの答も、公式で導
き出せるんだけどね」

阿良々木

「その境地、達したくねえ」

英語

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

「日本語にはこんなにも横文字が普及してるのに、なんていざ英語ってなると途端にできなくなっちゃうんだろうな」

「ふむ。しかし阿良々木先輩、普及しているとは言っても、じゃあその横文字の意味をきちんと満遍なく説明できるのかと言えば、そんなことはないだろう」

「あ、そっか。確かに横文字って、ニュアンスが曖昧になっちゃったりするもんね。日本語に訳せて言われても、訳せないもん」

「シュプレヒコール」

「あ、訳せない」

「バイエル」

「わかんねえ」

「カテーテル」

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

「駄目駄目」

「メルヘン」

「全然無理」

「まあ、今のはどれもドイツ語だけだな」

理科

阿良々木

「何より心外なのはさ、数学ができるんだからどうせ理科もできるだろう、できないってことはサボってることだよ、みたいな言い方をされることなんだよな」

八九寺

「まったくですね。阿良々木さんに理科なんてできるわけがないじゃないですか。無茶を言うにも程があります！ 数学ができるだけで十分に奇跡だと言うのに、こともあろうかそれ以上を求めるなんてわがままですよ！ 図々しいにもほどがあります！」

阿良々木

「僕のために怒ってくれるのは嬉しいけど、しかし八九寺、残念ながら僕に対する悪口になってるぞ」

八九寺

「阿良々木さんは理科なんて、女の子の名前としか思ってますんよね」

阿良々木

「あらぬ妄想だ」

八九寺

「物理も化学も生物も、全部女の子の名前です」

阿良々木

「病氣だよ」

体育

阿良々木

「ごめん。これ聞いちゃ駄目かもしれないけど、羽川、一個だけ教えてくれない？」

羽川翼

「いいよ。何？」

阿良々木

「創作ダンスって、結局、何をやってるの？」

羽川翼

「……………」

阿良々木

「あ。沈黙だ」

羽川翼

「えっとねー。多くは語らないけれど、端的に言うなら、あれをやらされるくらいだったら体操服はブルマのままで構いませんって感じ」

阿良々木

「そこまでか」

羽川翼

「トラウマにしかならない。……でも考えてみたら、その昔は、ブルマを穿かされた上で創作ダンスもやらされてたんだよね」

阿良々木

「トラウマだな」

保健体育

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

「保健体育といえばこの私。こんにちは、私が神原駿河だ」

「やっぱお前か」

「保健体育という言葉が、既にエッチだと思う」

「変わった病気だな」

「私がエッチだと言う言葉ベスト3。三位、思春期。二位、成長期。一位、反抗期」

「保健体育の話をしろ」

音楽

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

「音楽って言ってもね。ウチの学校、芸術系の授業は全般的に弱いよね」

「うん。あんま積極的じゃないよな。大体、音楽室が既じゃないじゃねえか」

「一応あることはあるんだよ。防音設備が整ってないってだけで」

「あんなの音楽室でも何でもねえよ。広い部屋だ」

「ピアノカってさ」

「はい？」

「小学校の音楽の話になるけど。ピアノカって、楽器としてかなりパーフェクトだと思わない？ 完成度が高いっていうか。だけど小学校初期の授業で使われるせいで、変に初心者向けの楽器扱いされちゃうのが、不遇だよな」

「あー、そうだな。リコーダーとかもそうだけど、子供でも問題なく使えるっていうのは、むしろ評価が高まってしかるべきポイントなのにな」

羽川翼

阿良々木

「今度みんなでピアニカ演奏会でも開こっか」

「……いや、同意した直後にこんなことを言うのはなんなんだけど、妙に背徳的な画になりそうだから、それはやめよう」

書道

阿良々木

「神原、お前さ、左利きなのに左手そんな包帯ぐるぐるになっちゃって、板書するときとかどうしてんの？」

神原駿河

「お察しの通り、右手で書いているな」

阿良々木

「書けるの？」

神原駿河

「全然無理だ。ミミズがのたくったような字しか書けない」

阿良々木

「はあん。大変だな」

神原駿河

「もっとも、元々左手でも金釘流の字しか書けていなかったから、問題ないと言えば問題ないのだ」

阿良々木

「なるほどな。そういや羽川って字イすげー綺麗なんだよな」

神原駿河

「それどころかあの人は、右手で書いても左手で書いても、まったく同じ筆跡で書けるらしいぞ」

阿良々木

「それはすごいことだけど、しかし何のためにそんなことをするんだ？」

神原駿河

阿良々木

「右手で勉強するのに疲れたら、鉛筆を左手に持ち替えるんだとか。子供の頃からそうしているうちに、どちらの手でも変わりなく字を書けるようになったそうだ」

「勉強するのに疲れたら、休めよ」

美術

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「私、実は絵エウまいのよ」

「……訊いてねえけど。はい？ お前、絵とか描ける奴なの？」

「ええ。絵の具代がかさむから今は引退気味だけど、中学時代はこれでも、かなり筆を振るっていたものよ。神原を描いてあげたりしたわ」

「ああ、神原がバスケで大活躍している姿を」

「芸術と言えはわかるかしら」

「やっぱ裸婦画かよ！」

「私がアーティストで、神原はヌーティスト。ヴァルハラコンビよ」

「やなコンビネーションだ」

「嘘よ」

家庭科

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

「阿良々木先輩。その、戦場ヶ原先輩の料理の腕前のことなのだが……」

「いや、別に下手ってわけじゃねえんだよ。ただ、味付けがかなり独特でな。仕方ないんじゃないか？ 味覚って結構育ってきた環境によるからさ」

「ふむ。確かに、人にはそれぞれ家庭の味というものがあるか」

「その意味じゃお前は将来有望だ。お前のお祖母ちゃんの手料理は、はつきり言って最高だ。ぶっちゃけ、ちょっと結婚したいと思ってるぜ」

「私と？」

「お祖母ちゃんと」

「……阿良々木先輩、さすがに私のお祖母ちゃんを守備範囲に入れるのはやめてもらえないか……？」

阿良々木

神原駿河

「守備範囲じゃねえ。ストライクゾーンさ」

「攻めの姿勢だな」

教師

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「ウチの学校の先生って、大体OBなんだってな」

「らしいわね」

「伝統的にそうなっているらしい。じゃ今通ってる生徒の中からも、将来的には直江津高校の教鞭を取る奴が現れるわけだ。……羽川とかが担任だったら、最高だよな」

「既にあのコ、現時点で、影の担任って呼ばれてるけどね」

「いや、こないだ日向の担任って呼ばれてたぜ」

「日向の担任って……、それはもう担任なんじゃないの？」

登下校

阿良々木

「僕はチャリ通なんだけど、神原は徒歩……っていうか、走りで通学してんだよな。やっぱそれ、トレーニングを兼ねてるわけ？」

神原駿河

「まあ、そうなのだが、しかし別の事情もある」

阿良々木

「別の事情？」

神原駿河

「私は自転車に乗れないのだ」

阿良々木

「マジで!？」

神原駿河

「いやあれ、乗ったことのない人間にはまったく乗れない乗り物なのだぞ？」

阿良々木

「えー？」

神原駿河

「あんな細いタイヤを縦に二つ並べて、それに全体重を預けつつ足を回転させるなど、怖過ぎる」

阿良々木

「そう言われたら難しそうだけど……」

神原駿河

阿良々木

「乗るなら補助輪が欲しいな」

「背徳的な画だよ」

クラブ活動

阿良々木

「つっても僕達、神原以外は大概帰宅部だったからな。千石も帰宅部らしいし……あ、でも、ガハラさんって、中学時代は陸上部だったんだっけ？」

戦場ヶ原

「ええ、そうよ。よく知ってるわね。何あなた、私のファンなの？」

阿良々木

「不愉快な受け答えだ！」

戦場ヶ原

「それともストーカー？ 気持ち悪いから近寄らないでくれるかしら」

阿良々木

「僕はお前のクラスメイトだよ」

戦場ヶ原

「あらそう。知らなかった」

阿良々木

「お前僕のファンじゃなさ過ぎだろう」

戦場ヶ原

「陸上部。確か、専門は短距離走だったわ——でも、本当にやりたかった競技は、短距離走じゃなかったのだけれどね」

阿良々木

「あん？ じゃ、お前が本当にやりたかった競技はなんなんだよ」

戦場ヶ原
阿良々木

「槍投げ」
「こわっ！」

放課後

阿良々木

火憐

月火

火憐

阿良々木

二人

「今でこそ僕、放課後は勉強はつかしてるけどさ。そうやってみると二年のときとか、自分が学校終わったあとに何をしていたのか、まったく憶えてないな。あれだけの膨大な時間、僕は一体何をしていたんだろう。火憐ちゃん。月火ちゃん。僕、去年の今頃、何してた？」

「放課後は大体、兄ちゃんはあたしをいじめて遊んでたぞ」

「うん。私もいじめられてた」

「兄ちゃんが勉強するようになって一番助かったのは、実はあたし達だからな」

「そうかそうか。だったらお前達、僕にもっと感謝したほうがいいんじゃないねえか？」

「反省の色がない！」

私服

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

「羽川の私服が見たい」

「……あの、そんなこと私に言われましても」

「こんなことお前にしか言えねえよ。あいつ、いつでも制服なんだもん。もう今となっては僕、羽川に限っては、裸よりも私服のほうが見たいくらいだぜ」

「そんなこと言う前に阿良々木さん、ご自身の私服の悲惨なセンスをなんとかしてくださいよ」

「悲惨!? 僕の私服が!？」

「ひょっとしたら羽川さんも、私服ヤバいのかもしれませんね。人間、一個くらいは欠点がないと、可愛げがありませんし」

「私服のヤバイ羽川……見てみたい!」

「阿良々木さんの羽川さんに対する愛って、無限なんですね……」

携帯電話

阿良々木

「携帯電話って、いつ持たされた？」

羽川翼

「高校生になってから」

阿良々木

「僕も同じ」

羽川翼

「この辺りの地方じゃ、大体そうじゃない？」

阿良々木

「神原に至ってはごく最近だぜ。あいつ馬鹿だから、僕と通話するためだけに携帯持ちやがった」

羽川翼

「あつはー。先輩冥利に尽きるじゃない」

阿良々木

「そう言えば、千石が今、親と交渉中らしい。携帯持たせて欲しいって

さ。あはは、それも僕が理由だったりしてな」

羽川翼

「そちらはちょっと笑えない」

メール

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

「携帯電話でメールを打つとき、ついついキーを押し過ぎてしまつて目的の文字を通り過ぎてしまうことってない？」「こ」を出したかったのに、キーを勢い一回多く押してしまつて「か」に戻つてしまった、みたいな」

「まあ、あるけど……面倒だよな。もう一回キーを連打しなきゃいけないって、こっちも軽くいらつてゐるから、また通り過ぎちゃったりしてな」

「そういうときってね、別にもう一回連打しなくても、リターンキーで戻れるのよ」

「え？」

「意外と知られてない機能」

「あ、本当だ……それどころかこれ、小さな『お』とか小さな『っ』と

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

かの拗音促音が、すげー簡単に出せる」

「いえーい」

「お前は何でも知ってるな」

「なんでもは知らないわよ。知ってることだけ」

「でも、なんでこんな便利な機能が知られてないんだ？」

「ん。んん。まあ、結局は慣れの問題で、キーを連打したほうが早いか
らかな」

「親指シフトかよ」

アルバイト

阿良々木

「別にするつもりもないから気にしたことなかったけど、ウチの学校って、バイトしてもいいんだっけ？」

羽川翼

「基本的には駄目だったはずだよ。学校側の許可を取ればOK、くらいの緩さだったと思うけど」

阿良々木

「ふうん。そう言えば、戦場ヶ原が忍野に金を払うために、親父さんの仕事を手伝ってたな」

羽川翼

「それはありでしょ」

阿良々木

「羽川はバイトしたいとか思ったことねえの？」

羽川翼

「ん。んん。まだ私は、社会のために働けるほどの価値を自分の中に見出してはないかな」

阿良々木

「志が高過ぎる……」

羽川翼

「強いて言うなら阿良々木くんの家庭教師って、バイト的だけだね」

阿良々木

羽川翼

「お金は払ってないけどな」

「お金より大切なものを、ちゃんといただいております」

テレビ

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「お前は知ってるかもしれないけど、神原の家って、大小合わせてテレビが二十台くらいあるんだぜ。びっくりした。散らかりに散らかってるあいつの部屋の中だけでも、既にテレビ三台あったもん」

「あの子、お金の使い方がおかしいのよ。日本の経済不況が回復したらあの子のお陰だと思っていいいわ」

「羨ましいっちゃ羨ましいよ。阿良々木家は、テレビがリビングに一台しかねえから。妹達といつもチャンネル争いだ」

「私に言わせれば、高校生で部屋にテレビがあるなんて、贅沢過ぎるわ」
「ま、そうかもな」

「戦場ヶ原家はテレビが一台しかないところか、部屋が一部屋しかないわよ」

ラジオ

阿良々木

「受験勉強に身イ入れ始めてから、やたらラジオを聴くようになった。

羽川翼

ラジオは受験勉強の友だよな」

阿良々木

「んー。まあ、ながら勉強って、本当はやめておいたほうがいいんだけどね。特に聴覚は、五感の中で一番敏感な感覚器官だから」

羽川翼

「そうなのか？」

阿良々木

「うん。実は人間って、視覚よりも聴覚のほうに重きを置いて物事を判

羽川翼

断してるんだよね」

阿良々木

「そっか。じゃあ、教科書の朗読テープをヘッドホンで聴きながら字幕映画を見ているほうが、受験勉強としては効率的ってことか」

羽川翼

「まったく勉強しているようには見えないけどね」

体操服

神原駿河

「お。ブルマの話か」

阿良々木

「違う。そんな衣料はもうこの世には存在しない」

神原駿河

「阿良々木先輩、そう一概に否定したものではないぞ。穿いてみればわかるが、あれほど運動に適した服もないのだ。脚に解放感があって、かなり動きやすいぞ？」

阿良々木

「穿いてみればわかるって言われても……僕が穿いてみてわかるのは僕の変態性だけだと思うんだけど……まあ元々あって、女子が運動しやすいようにって思想に基づいて設計された衣服らしいからな」

神原駿河

「結局人間、裸が一番ということなのだ」

阿良々木

「そんな結論には絶対辿り着かない」

プール

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

「うちの学校、プールないんだよな」

「とにかく設備に力を入れない学校だ」

「従ってスクール水着も存在しない。お前的には残念な話だろう」

「まったく。体育の授業における三大ロマンがもの見事に踏みにじられている」

「三大ロマン？」

「三大ロマン」

「聞くだけ聞いてやるよ。言ってみろ」

「その一、水着で通常授業。その二、水着で登下校。その三、裸でプール」

「一人でやれ」

「やっていいのか？」

阿良々木

「やらないで」

喧嘩

火憐

「火事と喧嘩はあたしの花。阿良々木火憐ちゃんに語らせろ」

阿良々木

「キャッチフレーズが怖えよ。お前のどの辺が僕の妹なんだよ」

火憐

「全てが兄ちゃんの妹さ。さあ兄ちゃん、なんでも聞いてくれ。個人レ

ベルの諍いから学校レベルの抗争まで、喧嘩沙汰というのなら、あたしに知らないことはねえ」

阿良々木

「僕がお前を知らねえよ。んじゃ質問。僕の知り合いに隙を見てはホッ

チキスで僕を殺そうとする謎の人類がいるんだが、これ、どう対処すればいいんだ？」

火憐

「……それはあらかじめリムーバーを用意しておくしかないんじゃないか？」

「……」

阿良々木

「刺されない方法を教えてくれ！」

体育祭

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

「体育祭というイベントについては、私は昔から不満があるのだ」

「なんてだよ。お前の見せ場じゃねえか」

「男女差別もはなはだしいと思うのだ。時代錯誤もはなはだしい。女子だって、騎馬戦や棒倒しをしたい！」

「……したいかあ？ あの辺の競技は男子でも微妙だぜ？ やらなくていいって言われたら、僕はやらないぜ？」

「上半身裸で揉み合いをしたい！」

「清々しいよ、お前は」

ニックネーム

阿良々木

「ニックネームつけられたことって、あんまない」

羽川翼

「へえ」

阿良々木

「友達がいなかったから」

羽川翼

「悲しい……。なんてわざわざ悲しい情報を付け加えたの……？」

阿良々木

「戦場ヶ原のことをガハラさんって呼び始めたのは僕だけど、羽川、お

前はニックネームとかついたことねーの？」

羽川翼

「小学生の頃、『バサ』って呼ばれてたかな」

阿良々木

「『バサ』？」

羽川翼

「翼のバサ。バサバサって続ければばたいてる効果音っぽいし、的を

射てはいたよね」

阿良々木

「じゃ、これからは羽川のこと、バサって呼んでもいい？」

羽川翼

「んー。やめというて」

更衣室

阿良々木

「更衣室つつつても、部活入ってなかったら、更衣室なんか使わないんだよな。体育の授業のときなんか、教室で着替えちゃうわけだし」

神原駿河

「更衣室という言葉は、エッチだ」

阿良々木

「話合わせてくれよ！話を合わせてくれ！なんてお前、頑なに自己主張しかしねえんだよ！」

神原駿河

「いやでもどうだ、阿良々木先輩。更衣室の更衣という言葉の響き。好きの好意で行うの行為で、もうなんだか実にブリリアントではないか？」

阿良々木

「この話はバスだ！」

身体測定

八九寺

「身体測定と言えば、阿良々木さんは女子の様子が気になって仕方ないかもしれません、ここでそういう話をしちゃ駄目ですよ」

阿良々木

「最悪の前振りだな！ しねえよ、そんな話！ 思ってもしねえよ！
大体僕が気になって仕方ないのは、自分の身長なんだよ」

八九寺

阿良々木

「中二から変化のない身長なんて、今更氣にしても仕方がないでしょう」
「いや、それが悔れない話でな。コンディション作りに失敗したら、身長が縮んでることがあるんだよ」

八九寺

「……私に抜かされないでくださいね」

出欠

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「どっちのシュッケツ？ 血が出るほう？」

「出席欠席のほうに決まってるんだろ。何で無駄に血生臭いんだよ」

「でも阿良々木くんの身体を切れば血が出るでしょう？」

「なんて僕の身体を切るの!？」

「出席欠席のほうなのね。テンション下がるわね」

「なんでテンション上がってたんだよ……で、どうだ。僕達の中で、皆勤賞の奴っているのか？」

「いないでしょ。私は病院通いが続いてたし、羽川さんも、何回か休んでるはず。神原も、冬には体調を崩しがちだし」

「まあ、冬場であろうと、あいつは裸で過ごすことが多いからな」

「阿良々木くんはズル休みが多かったから、皆勤賞どころか、下手すれば留年のピンチだったのよね」

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

「神原と同級生ってのも、考えてみりゃ楽しそうだけど。『阿良々木先輩……ああ、もう先輩ではないのだった。じゃあ、阿良々木』みたいな感じ」

「……その何が楽しいの」

「神原に冷たくあしらわれたという謎の欲求が、僕にはあるんだよ」

学級閉鎖

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

「学級閉鎖って、憧れる」

「……なんかやばげな発言だな」

「学級崩壊と同じくらい憧れる」

「千石、お前……」

保健室

阿良々木

「保健室かあ。んー」

羽川翼

「どうしたの？」

阿良々木

「いや、僕がやんちゃだった頃に、お世話になったなーと思ってさ。思い出してた」

羽川翼

「やんちゃだった頃って。やっぱこう、バイオレンスな日々の中、治療に通って」

阿良々木

「いや、眠くなったときに、忍び込んでさ。ほら、学校の中で唯一ベッドがある場所だから。仮眠室として使ってました」

羽川翼

「……そんなのすぐ見つかるでしょ」

阿良々木

「だから見つからないように、斧男よろしくベッドの下に隠れて寝てたんだ」

羽川翼

「本末転倒だね」

阿良々木

「起きたら身体めっちゃ痛えの」

図書室

阿良々木

「羽川。お前よく、放課後に町の図書館に通ってるみたいだけとさ。学校の図書室には行かないのか？」

羽川翼

「んー」

阿良々木

「品揃えが不満だとか？」

羽川翼

「んー。不満っていうんじゃなくてー。ちょっと言いにくいんだけどー」

阿良々木

「なんだよ。珍しく煮え切らないな。言いにくいことって……図書委員の生徒達と折り合いが悪いとか？」

羽川翼

「じゃなくて。入学して直後に足を運んではみたんだけど……、蔵書

阿良々木

がね、全部既読本だったんだ」
「やな新入生がやってきた！」

夏休み

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

「僕達の地方の夏休みって、世間一般に較べて短いんだよな」

「うん。一般的には、九月一日から二学期が始まるらしいね」

「その分冬休みが長いから別にいいんだけど……ただ、八月後半におけるテレビや週刊誌との話題のかみ合わなさっぷりは悲しくなるよな」

「あの時期だけは自分が住んでるところが本当に日本なのかどうか、疑わしくなっちゃうよね」

冬休み

阿良々木

「夏休みもそうだけど、冬休みも基本的に暇だよな。学校行かなきゃすることなんかねーだろ。まったく、あんな長い休み、みんな何して過ごしてるんだろ」

八九寺

「いえ、あの、阿良々木さん……恐らくはみなさん、遊んでいらっしやるんだと思いますよ」

阿良々木

「遊ぶ」

八九寺

「阿良々木さんって、遊ぶの下手そうですね」

阿良々木

「な、ななな、何言ってるんだよ。人を面白味のない人間みたいに言うなよ。滅茶苦茶得意だよ、遊ぶの。遊びの王だよ。遊びあそばされるよ。」

むしろ僕の人生には遊びしかねえよ」

八九寺

「それともうかと思えますねー。でも一体何をして遊びあそばされるんですか？ 一人で」

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

「一人でって決めんなよ！」

「いやあ。だって、阿良々木さんが誰と遊ぶんですか」

「……妹と」

「……私が遊んであげます！」

春休み

阿良々木

羽川翼

「春休みのことは喋りたくない」

「うん。パスでいいと思うよ」

ゴールデンウィーク

羽川翼

阿良々木

「ゴールデンウィークもパスでいい？」

「おっけ」

避難訓練

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

「避難訓練といえば、阿良々木さん、伝説持ってましたよね」

「あ？ いやあの話は、前に別るところでしちゃったから、もういいよ」

「あの伝説は何回聞いても面白いんですって。むしろ何回でも聞きたいんです。なんか前なんか、割とさらっと話しちゃったから、聞き逃しかたも多いと思うんです。お願いしますよ、阿良々木さん。私がちゃんと合いの手入れますから、びっと披露しちゃってください」

「まあ、お前にそこまで頼まれちゃあ、断れないな」

「ありがとうございます。勉強させていただきます」

「振って来い」

「はい。……えー、あ、そう言えば阿良々木さん、阿良々木さんって、避難訓練における有名な標語、『お・か・し』を、何の略だと思ってらっしゃったんですたっけ？」

阿良々木
八九寺

「幼い、可愛い、少女！」
「ロリっけー！」

通知表

阿良々木

「通知表と言えば羽川さん。やっぱオール5ですか？」

羽川翼

「感じ悪い言い方しないでよ……」

阿良々木

「お前知らないだろ。1と2はな、黒いインクじゃなくて赤いインクで押されてるんだぜ」

羽川翼

「それはヤダね」

阿良々木

「いっぺん通知表が真っ赤だったことがあってさ。ホラー映画っぽかった」

羽川翼

「それは怖い。……あれ？ 阿良々木くん、数学が1か2ってことはないでしょ？」

阿良々木

「先生が勢いあまって間違えたらしくて。5の数字が、赤のインクで押されてた。あれはさすがに屈辱だったぜ」

マラソン大会

阿良々木

「進学校にしては珍しく、マラソン大会だけは、ウチの学校、何故かガチで行われるんだよな。年四回。男子十キロ女子八キロ。サボって歩いてたら後ろから回収車が走ってくる」

千石撫子

「かなり入りたくない学校だね……」

阿良々木

「入学案内には書かれてない。千石も迂闊に志望すんなよ。いざ卒業って段になって振り返ってみればわかるけど、直江津高校って通ってる生徒も学校自体も、なんか変だぞ」

千石撫子

「うん、わかった……まあ、あえて志望する理由もないよ。撫子が高校生になる頃には、暦お兄ちゃんは卒業しちゃってるから」

阿良々木

「あん？」

文房具

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

「私が喋っていいのかしら」

「お前以外誰が喋れるんだよ。さあ戦場ヶ原。文房具に対する熱い思いを、どうぞ存分に語ってくれ」

「テープ糊って便利よね」

「いい子ぶるな！」

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

「直江津高校って、実は髪染めるの、禁じてないんだよな」

「田舎だからねー。もとよりそんな発想がないから、禁じる必要さえないってことでしょ。変に禁じたら若者の反骨精神を刺激して、むしろ染めなくなっちゃうだろうし」

「だな」

「テレビで都会の映像とか見たらびっくりするよね。髪の色から髪型から、え、それ大丈夫なの!? って言いたくなる感じ」

「でも、茶髪巻き毛の羽川とか、ちょっと見てみたい」

「自分の髪を巻いてなさい」

委員長

阿良々木

「羽川って、昔っからずっと委員長なんだよな」

羽川翼

「うん。まあね」

阿良々木

「みんなが羽川を選ぶのはわかるし、確かに適役だとは思うけど、羽川自身には委員長職にこだわりみたいなものとかあるわけ？」

羽川翼

「なくはないけど。でも、基本的に、みんながやらせてくれるからやらせてもらってるって感じかな」

阿良々木

「なるほど」

羽川翼

「阿良々木くんだって、副委員長。やってみれば遣り甲斐のある仕事でしょう？」

阿良々木

「いや、僕は羽川と一緒にできるんだったら、なんでも楽しいんだよ？」

不良

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

「不良……って、いないよな。ウチの学校」

「風紀の乱れようがないからな。そもそも町全体の治安の良さも、鍵が
いらぬ級だ。あ、でも、そう言えは、確か阿良々木先輩は、羽川先輩
から不良扱いされていたのではなかつたか？」

「過去形じゃなくて、今でもその勘違い自体は続いてるぜ。……逆に言
えはそのお陰で僕は羽川に構ってもらえるんだから、結果オーライって
とこだ」

「阿良々木先輩、さすがにちよつと羽川先輩のことを好き過ぎないか？」

階段

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「学校の校舎の特殊な点って何だと思う？」

「いや、そもそも学校の校舎が特殊だと考えたことがあんまりないんだけど……」

「だからあなたは愚かなのよ」

「生き生きと僕を責めるな」

「死に死にと死ぬがいいわ」

「死に死について。どういう意味だよ。で？ 学校の校舎の何が特殊なんだ？」

「階段」

「はい？」

「学校の校舎って、基本エレベーターがなくて、階段のみじゃない。あのスケールの建物じゃ、まずありえないことよね」

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「あー。言われてみりゃそうだ」

「これが結構いい運動になってるらしくてね。社会に出てから太る人が多いのは、その階段昇降がなくなるからだという説もあるそうよ」

「ま、もしも校舎にエレベーターが設置されていたら、僕とお前が関わりあうこともなかったんだよなあ」

「階段さまさまよ」

怪談

羽川翼

「階段の次は怪談の話だけど……ウチの学校、七不思議とかあったっけ？」

阿良々木

「お前が知らないものを僕が知ってるわけねーだろ。お前が知らなきゃ誰も知らねーよ」

羽川翼

「ていうか、既に阿良々木くんは、七じゃ足りないくらいの不思議を経験してるよね」

阿良々木

「怪談が怖くなくなっちゃった。今なら花子さん口説けるぜ」

青春

阿良々木

「漠然としたテーマではあるが……まあやっぱ、こういうのは大人に訊いちゃおう。忍野。青春ってなんだ」

忍野メメ

「はっはー。青春だって？ 阿良々木くんは相変わらず元気いいなあ、何かいいことでもあったのかい？ 青春、それはきみ達自身のことなさ。わざわざ姿勢を正して考えるようなテーマじゃない。十代の貴重な一日一日が、すべて青春という映画のワンシーンなんだよ」

阿良々木

「かっけえ……」

忍野メメ

「あるいはエロい妄想のことだよ」

阿良々木

「台無しだ！」

屋上

阿良々木

「漫画とかじゃよく物語のステージになるけれど、校舎の屋上って、基本立ち入り禁止だよな」

羽川翼

「危ないもんねー。掃除も大変だし」

阿良々木

「屋上に呼び出されて告白されるって、男のロマンだけど」

羽川翼

「受け身だね。どうせなら呼び出して告白しなよ」

阿良々木

「何？ 勇気出していいってこと？」

羽川翼

「私以外に」

授業

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

「暦お兄ちゃん。授業中って、なんであんなに眠くなっちゃうんだろうね」
「あー。中学生の頃はとにかく眠いよなー。別に夜寝てないわけでもないのにな。成長期って奴かね」

「垂らした前髪のお陰で、うたた寝しててもバレないからいいんだけどね」
「お前結構図太いな」

席替え

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

「席替えのブレッシャーって、撫子、駄目」

「席替えのブレッシャー？ って、何？」

「クジを引く前はあんなに楽しそうだったみんなが、大体は残念な結果に終わってしまったって、教室全体ががっかりした空気になることに耐えられない」

「……まあ、確率的に、がっかりして終わる生徒のほうがいいイベントではあるよな。事前に盛り上がる分だけ、落差は激しいよ」

「だから視力が悪い振りをして、一番前の席にしてもらってる。一抜けするの」

「ちなみにお前の視力って、いくら？」

「左右共に2・0。前髪透けて見えるよ」

「前髪切れば5・0くらいあんじゃないかねえの？」

教科書

阿良々木

「頭のいい奴のこりやスゲエって話なんだけどさ」

八九寺

「聞きましょう」

阿良々木

「羽川とか戦場ヶ原とか、あいっらって、学年の最初に教科書揃えたら、まずその日にいきなり全ページに目を通すんだって」

八九寺

「……何のために」

阿良々木

「まず最初に全体像をつかむってことなのかな。心構えが違うよ、あいっら」

八九寺

「あのかた達にとっては予習さえも復習ですか」

阿良々木

「絶対教科書に落書きとかしねーんだろうな」

ゲームセンター

阿良々木

「僕達の町でゲームセンターって言ったら、デパートのおもちゃ屋さんにあるあれになっちゃうよな」

千石撫子

「うん。神原さんが遊んでるの、よく見るよ」

阿良々木

「よく見られてんじゃねえよ。ったくあの後輩、小学生の子供達に迷惑かけるなってえの」

千石撫子

「ううん、むしろヒーローだよ。ゲームマスター神原の名前で通ってるみたい」

阿良々木

「なんであいつ、そんなあちこちで名を馳せてんの？」

バレンタインデー

八九寺

「バレンタインデーの話とかしても大丈夫ですか？」

阿良々木

「なんだよ、遠慮すんなよ。好きにだけしろよ。僕は聞き役に徹するから」

八九寺

「なんて聞き役に徹するんです……。何か一個くらい、バレンタインに関

するエピソードもあるでしょ？ 学園生活には外せないイベントですよ」

阿良々木

「ねえよ。大体、日本人が本当のバレンタインを経験するのは社会に出

てかららしいぜ。なんかこう、社内の複雑な人間関係とかでさ」

八九寺

「世知辛いお話です」

阿良々木

「チョココレートだけに、ビターだな」

移動教室

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

「一時間目が移動教室だったことを忘れて、一人クラスに取り残されてしまったときの衝撃。何のいじめかと思ったわ」

「うん。僕も経験ある」

「危うく文科省に駆け込むところだったわよ」

「友達がいらないから、移動教室の情報を誰からも教えてもらえないんだよな」

「逆になぜか次は移動教室だと思い込んで、鍵のかかった視聴覚室の前で呆然としたりね」

「ごめん、その経験はない」

黒板

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

「羽川さんって、黒板に書く字さえ綺麗だけど、あれってどこかで練習してるのかしら？　チョークなんていう、鉛筆とはまったく違う仕組みの筆記具で、地面に対して垂直な面に、どうして普段と同じ字が書けるの？」

「羽川に疑問を持つなよ。そんなもん、字どころか、コンパスを使わずに正確な円が描けるような奴に、何をかいわんやだろ」

「悔しいわ」

「なんて悔しいんだよ。だったらお前も黒板に字イ書く練習すればいいじゃん」

「私にとって黒板は、書くものではなく引っかくものなのよね」

「練習も本番もすんな」

将来の夢

忍野メメ

阿良々木

忍野メメ

阿良々木

忍野メメ

阿良々木

忍野メメ

阿良々木

「阿良々木くんはさ、将来の夢とかあるの？」

「ああ？ いや、これと言ってどうだろうなあ。食ってかなきゃいけないから、そりゃ働きはするんだろうけど」

「今時だねえ。ま、今時だろうと昔時だろうと、夢なんか見ないほうが現実的か」

「おいおい。大人が子供にそんなこと言うなや。嘘でもいいから、夢見させてくれよ」

「努力すれば夢はきつと叶う！」

「浅っ！」

「努力すれば夢は意外と冷める！」

「深っ！ でも嫌な台詞！」

ラブレター

八九寺

「じゃ、この話はパスと言うことで」

阿良々木

「決め付けないよ！」

八九寺

「阿良々木さんには全く縁のない単語でしょう。ラブレターって。まだしもエアメールのほうが届く可能性が高そうですね」

阿良々木

「つーか今時、ラブレターそのものが珍しいだろ。メールで済ましちゃうんじゃないのか？」

八九寺

「んー。でもメールには決定的な弱点がありますよね」

阿良々木

「なんだよ」

八九寺

「知り合い以外には告げません」

阿良々木

「おおー」

修学旅行

羽川翼

「二年の年末くらいだったけ？ 修学旅行に行ったのって」

阿良々木

「あー。思い出したくなー」

羽川翼

「なんで？ 楽しかったじゃない。古都京都」

阿良々木

「友達のいない生徒にとって修学旅行なんか針のムシロ以外のナニでもねえよ。自分がいるせいで班行動や宿泊部屋が盛り下がってるのがわかるんだぜ。『ハメ外してはしゃぎたいけど、知らない人が見てるし』『みたい』『みたい』。そんな空気をひしひしと感じてた」

羽川翼

「阿良々木くん、そんな気持ちで五泊六日を過ごしてたんだ……」

阿良々木

「ちなみに戦場ヶ原は欠席。賢い選択だよ」

宿題

阿良々木

「宿題をやらなくても怒られなくなったとき、落ちぶれたなーって思った」

羽川翼

「先生から見限られた、って感じたわけだ」

阿良々木

「そういうこと」

羽川翼

「じゃ、そこで奮起して頑張ればいいのに」

阿良々木

「そこで奮起できる奴は見限られねえよ」

羽川翼

「あ。ん。でも私、中学生の頃、宿題出してもらえなかった時期があるよ」

阿良々木

「え？　なんて？」

羽川翼

「担任の先生が、『羽川の勉強の邪魔をしちゃいけないから』って言って、

よかれと思っていることだったのはわかるけど、何故かちよつと傷ついたわ」

阿良々木

「お前はとにかくセンサーショナルだな」

お弁当

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

「僕の悲しい話を聞かせてやろう」

「できれば遠慮させていただきたいですねー」

「僕の人生においてもっとも友人のいなかった、高校二年生のときのエピソード。当然、昼休みに一緒にお弁当を食べる相手なんかないわけだ」

「もうその時点で泣きそうです」

「友達がいなのは平気だけど、一人で弁当を食ってる寂しい奴だとは思われたくないわけよ。そこで僕がどうしたか」

「どうなさったんですか」

「早弁」

「早弁？」

「おなか为空いているから昼食はお先にいただきました。ご一緒に食べて申し訳ありませんが、皆さんはどうぞ後ほどごゆっくり召し上がっ

八九寺

阿良々木

八九寺

てください、とか。そんな感じ」

「悲しいプライドですねぇ！」

「戦場ヶ原がそんな僕の様子を腹の中で爆笑しながら見ていたんだと思うと、死にたくなるぜ。お、いい時間だな。八九寺、メシ食いに行こうぜ」

「号泣しながら了解です」

受験勉強

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

「受験勉強。僕が今まさにしていることだ。ちょっと前まではこんな自分をまるでイメージできなかったけど、逆に言えば、もっと前から始めておけばと思うことしきりだな」

「何かを始めるのに遅いってことはないよ」
「そうかな」

「うん。阿良々木くんには来年も再来年もあるんだから。信念のある目標に賞味期限はないんだよ」

「いい言葉だけど羽川、今年のタイミングでそれを言われると、モチベーションシロダウンにしかない」

推薦入試

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

「ガハラさんは大学、推薦で行くって話だけど。推薦入試って、どういうシステムなの？」

「阿良々木くんは知らなくても一生困らないシステムね」

「システムさえ教えてもらえねえのかよ」

「て言うか私もよく知らないのよ」

「それでいいのか？」

合唱会

阿良々木

「合唱会？ あ、僕のトラウマだ」

八九寺

「おや、どうしてです？ 別段、阿良々木さんがトラウマを負うタイプのイベントとは思えません」

阿良々木

「歌うのが嫌でさ、指揮者に立候補したんだ。そして一票も入らず、落

とされた」

八九寺

「あなた、なにやってるんですか」

阿良々木

「戦場ヶ原はこのときも大爆笑だっただろうな」

肝試し

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

「肝試し。二年のときにクラスイベントとして、校舎でそんなのが開かれたらしいんだ」

「らしいって」

「誘われませんでした」

「……まあ、戦場ヶ原さんも、同じように誘われなかったわけでしょう？」

「いや、戦場ヶ原は誘われたらしいんだ。断ったそうだけど」

「阿良々木さんって、じゃあ戦場ヶ原さんよりクラスで浮いていたんですか？」

「僕の携帯番号、誰も知らなかったんだよ。あー、僕も誘われた上で断りたかったー」

「歪んでますねえ」

休み時間

阿良々木

「休み時間が十分って、短いよな。次の授業の準備をするだけで終わっちゃうっての」

羽川翼

「休み時間であって遊び時間じゃないからね。基本、次の授業の準備をする時間なんだと思うよ」

阿良々木

「だけど休み時間のプロはその十分で、コンビニに行って雑誌を立ち読みして帰ってくるからな。びっくりするぜ」

羽川翼

「誰よ。休み時間のプロって」

阿良々木

「神原プロ」

出席番号

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

「人間を数字で管理する出席番号の悪、みたいな議論がある」

「あるよな」

「しかしそんなこと言い出したら、バスケの背番号なんて、非人道の極みなのだ。『四番マーク』だぞ」

「ま、敵の名前いちいち憶えてられないだろうし、それは仕方ないんじゃないねえ？」

「ふむ」

「僕はクラスメイトの名前も憶えてないけどな」

「それは冷たいなあ」

「いや、言っとくけどさ、クラスメイトも僕の名前を憶えてないんだよ？」

文化祭

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

「やっぱあれですか？ 文化祭についても、阿良々木さんは暗い思い出を抱えてらっしゃるんですか？」

「いやいや。今年なんかあれだぜ。僕が副委員長で羽川が委員長、ふたりで仕切って一緒に準備してんだから、楽しくないわけがないぜ。放課後、教室にふたりで居残っていちやラブだぜ」

「去年一昨年は？」

「バス」

林間学校

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

八九寺

阿良々木

「阿良々木さん。ものすごく寒いこと言っているんですか」

「あ？」

「千石さんしか笑わないという、ブリザード級のギャグです」

「いいよ。僕はお前の実力を知ってるから、どんなつまらないこと言っても、それは一過性のものとして受け止めてやる」

「林間学校を、アメリカの賢い学校だと勘違いしていたことがあります」

「なんて」

「人民の人民による人民のための学校です」

「リンカーン学校!？」

転校生

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

「小学校・中学校の頃はともかく、高等学校となると、転校生って滅多にいないよな」

「うん。特にウチは私学だしね。私達の学年には一人もいなかったよ。ウチの編入試験、極悪な難易度を誇るらしいから」

「極悪？」

「私が落ちる、という噂」

「じゃあ誰一人通れねえよ」

学問

羽川翼

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」

阿良々木

「学問ノスゝメだな」

羽川翼

「この言葉って、今時の格差社会においては檜玉にあげられがちだと思わない？」

阿良々木

「そうだな。ていうか僕があげてる。ちょっとそれは理想を追い過ぎじゃないかいつて。現実には即してないってさ。人の上には人がいるし、人の下には人がいるよ」

羽川翼

「うん。だけど福沢諭吉先生は、そもそも原文で、それと同じことを言ってるんだよ。『天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず』——
『と言うけども、なんて現実はどうじゃなんだろうね』って。意識だけと」

阿良々木

「伝聞だったの!？」

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

「うん。更にこんな風に続きます。『どうして現実的には上下が生じるのか。上下の違いはなんなのか。それはね、学問を習得するかどうかの違いなんだよ』。ことほどさように、学問ノスゝメです」

「主張したいポイントがズレて伝わってんじゃないかねえかよ」

「インパクトの強いところだけが残っちゃったんだよね。不本意だったと思うよ、福沢先生」

「……勉強しよっと」

読書

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「結局のところ、ガハラさんの趣味って、読書ってことていいんだよな」
「ええ。ま、阿良々木くんの推測通り、話しかけられるのが嫌だから、あえてこれ見よがしに本を読んでいたというのものもあるわ。名付けて本バリヤー」

「うん。基本、本を読むって行為は周囲に対する『話しかけるな』って意思表示だからな」

「ヘッドホンに近いものがあるわね。携帯電話をいじるのも、実は同じ意味合いなのかしら。私は自分の世界に没頭しています、ゆえにあなた達には興味ありませんという、わかりやすいアピールよ」

「逆コミュニケーションスキルって奴か」

「話逸れるけど、こないだね、また羽川さんに『負けた!』て思わされたの」

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「だからあいつに對抗しようと思うなよ。なんだよ。今度は何で負けた気分になされたんだよ」

「町で見かけた日曜日のあのコ、ブックバンドで縛った本を持ち歩いていたの。格好良過ぎて見蕩れちゃった。ブックバンドって。どこで売ってるのよ、そんなの」

「僕もアメリカのドラマでしか見たことねえわ、それ」

「私の対羽川さん戦争、ここまで一勝九十九敗」

「一勝は何？」

「ひ・み・つ」

衣替え

阿良々木

「衣替え。ときめくよね」

八九寺

「その話、私に振らないでもらえませんか？」

阿良々木

「仕方ねーじゃん。他の奴にいったら変態扱いされるんだから。まったく、困ったもんだよな。冬服から夏服に着替える女子に、男子がどれだけ期待してると思ってたんだよ」

八九寺

「神原さんならわかってくれるんじゃないですか？」

阿良々木

「衣替えに関しては、僕とは思いが食い違うんだよ。僕はあいつと違って、夏服から冬服へのチェンジでもときめくんだ。女子のダッフルコート。最高じゃん。女子の厚着にがっかりしない男、それが阿良々木暦です」

八九寺

「阿良々木さんはあれですよね。女子から見れば、阿良々木さんほどチヨロい男子はいないんでしょうね」

阿良々木

「なにい？」

八九寺

阿良々木

八九寺

「阿良々木さん、きつと衣替えどころか、女子が軽く髪型を変えただけでときめくんでしょう？」

「ぶっちゃけときめくな」

「お洒落のし甲斐がありますよね」

体育館

阿良々木

「体育館つつたら、やっぱりお前ってことになるのか？ 神原」

神原駿河

「まあ私ということになるう。バスケットは基本、体育館でやるものだからな」

阿良々木

「屋外じゃバウンド変わってうまくドリブルできねーもんな。じゃあ、体育館について何か言いたいことはあるか？」

神原駿河

「ふむ。では阿良々木先輩、こんな話を聞いてくれ。体育館の屋根に、バレーボールが挟まっていることがあるよな」

阿良々木

「あーあー。天井サーブとか打っちゃってな。忘れた頃にそのボールが落ちてきて危ねーんだ」

神原駿河

「我が校の体育館の屋根には、私が打ち上げたバスケットボールが多数挟まっている」

阿良々木

「それは危ねえどころの話じゃねえぞ！」

神原駿河

阿良々木

「天井シュートを編み出そうとしていた頃の名残だ。ふふ、こんな話、
今だからできることだな」

「今するのは遅い！」

気象警報

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

「台風の子節。警報で学校がお休み。テンション上がる」

「僕には段々お前って奴がわかってきたぜ」

「朝八時までに警報が発令されなかったら、大雨の中、学校に行かないやいけ。テンション下がる」

「お前あれだな。ちっちゃなことでもものすごく幸せになったり、ものすごく不幸せになったりする奴だな」

「台風で家の窓割れた。テンション上がる」

「上がるの!？」

「台風で継で海の荒れようがいまいち。テンション下がる」

「ごめん、お前って奴がわからなくなってきた」

掃除当番

羽川翼

「戦場ヶ原さんって、掃除当番サボりがちだよな」

阿良々木

「掃除当番に限らず、あいつ色々サボるのうまいんだよ。サボタージュ

の腕前が、僕なんかの比じゃねえ。思い出してみれば、学期末の大掃除のタイミング、いつもあいつ病院に逃げてた」

羽川翼

「掃除が嫌いなのかな？」

阿良々木

「いやいや、共同作業が嫌いなんだよ。几帳面っていうか、相当に神経

質な奴だからな、掃除はむしろ好きはずだぜ。家とか異様に綺麗なんだ。アパート周辺まで含めて、チリひとつ落ちてない」

羽川翼

「神原さんの部屋には行けないねー」

阿良々木

「ヴァルハラコンビは、やっぱバランス取れてるよ」

五月病

月火

「お兄ちゃん、五月病にかかったこと、ある？」

阿良々木

「五月病の定義にもよるが……もし、新しい環境にうまく馴染めず落ち込んだり、環境が変わったというのが五月病の定義なら、僕の高校生活は一年中五月病みたいなもんだったよ」

月火

「ふうん」

阿良々木

「お前はとうよ、月火ちゃん。クラス替えとかで、落ち込んだりなんかしないの？」

月火

「私にとっては町全体がクラスみたいなのだから。遠くに引越してもしない限り、環境が変わったりしないよ」

阿良々木

「交友範囲、広過ぎだろ」

球技大会

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

「つまり私の出番だな」

「お前、バスケットボール以外の球技もできるの？」

「高校で行うようなスポーツなら一通りは。阿良々木先輩は、球技はど
うなのだ？」

「普通かな。球技大会にしたって、あんまマジでやるわけじゃないし
……参加することに意義があるって感じだよ。あ、でも今年度の球技大
会は楽しかった」

「なぜ？」

「公然と、体操服の羽川を応援できた」

「阿良々木先輩……さすがにそれは……」

恋愛

阿良々木

八九寺

「八九寺——。恋について語ろうぜ」

「嫌です」

職員室

阿良々木

千石撫子

阿良々木

千石撫子

阿良々木

「職員室には独特の怖さがあるよな」

「うん。それは中学校でも同じだよ」

「まさに大人の世界って感じ」

「うん。呼び出されても絶対行かない」

「お前って大人しくて内気なだけであって、決して真面目なわけじゃないんだな」

朝礼

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

「羽川さんて、朝礼でよく表彰されてるわよね」

「ああ。表彰され過ぎてて、今や一体あいつがどういう理由で表彰されてるのかもよくわからん」

「先生がたの訓話の間に生徒が貧血で倒れるというのはよくある話だけど、羽川さんが表彰されてる間に、一体どれだけの生徒が倒れてきたのか」

「うん。気にしてた」

学級会

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

阿良々木

戦場ヶ原

「ウチのクラスにおいては、学級会なんてあってないようなもののよね」

「問題になりそうなのは、羽川が先に片付けちまうもんな」

「自動的に自習の時間が増えてしまうという……クラスメイトにしてみれば、痛し痒しよね」

「羽川、自習用のプリントまで作ってくるもんな……」

「あのコの性格を学級会の議題にすべきじゃない？」

ボランティア

阿良々木

月火

阿良々木

月火

阿良々木

「お前ら、休みの日とか、よくボランティア活動とかに参加してるよな」
「うん。ていうか、ボランティアはファイヤーシスターズの主な活動のひとつだね。私達、暴れてるばかりじゃないんだよ」

「それだけやってくれてりゃ、僕もいらん苦勞をしなくてもいいんだけどさ」

「アリバイ作りとも言います。普段から善行を積んでいれば、たまに暴れてもお目こぼしをもらえる」

「お前は腹黒い妹だよ」

持ち物検査

阿良々木

「答えられないなら答えてもらわなくてもいいんだけど。ガハラさん、お前、持ち物検査とかってどうやってクリアしてたの？」

戦場ヶ原

「何よ。高校生が文房具を持ち歩くんなんて、当たり前のことじゃない」

阿良々木

「量がおかしいだろ、量が」

戦場ヶ原

「心配しなくとも女子校じゃあるまいし、スカートなんて調べられないわよ」

阿良々木

「あー、そりゃそっか」

戦場ヶ原

「あ、でも、うっかり全円分度器を見つけれそうになったときがあって、そのときはさすがに焦ったわね。これは一体何に使うんだって訊かれてたら、答えられなかったもの」

阿良々木

「で、それは一体何に使うんだ？」

テスト勉強

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

羽川翼

阿良々木

「テスト勉強について、ないと思って訊きます。羽川、一夜漬けってしたことがある？」

「ない」

「徹夜は？」

「ないね」

「……なんで？」

「夜は、眠いてしょ？」

「眠いな」

廊下

火憐

「廊下に立たされたことがある」

阿良々木

「マジで？ このご時世に？」

火憐

「うん。今の担任、厳しくてさ。忘れ物したとき、廊下に立たされるなん

阿良々木

てまだマシだぜ。机の上に立たされたことさえあるよ。すげー晒しもん」
「それ、大変なのは後ろの席の奴だよ。お前の身長で机の上に立ったら、

火憐

もうそれは電球を交換する人にしか見えねえだろ」
「あ、いや、兄ちゃん。そうは見えなかったはずだ」

阿良々木

「なんで」

火憐

「立たされたって言っても逆立ちだから」

阿良々木

「お前それ自ら率先してだろ。担任が厳しいとかじゃなくて、自ら率先

してハードル上げたんだろ」

火憐

「あたし、Mかっこいい？」

阿良々木

「カリスマだよ」

旅行

八九寺

「高校生ともなるともう大人ですけれど、阿良々木さん、友達同士で旅行とかなさらないんですか？」

阿良々木

「僕にそれを訊くか。お前はどれだけ残酷なんだよ」

八九寺

「いえでも、今からでも遅くないでしょう。阿良々木ハーレムのメンバーを率いて海水浴とか、行ったら面白そうじゃないですか。『海だーっ！』ってあれ、やりましょうよ」

阿良々木

「あー。僕、そーいや海って見たことねえんだよな」

八九寺

「あら」

阿良々木

「海なんて嘘だって言われたら、信じる」

八九寺

「あらら」

阿良々木

「ガキんとき、妹達と川に遊びに行ったことはあるけどな」

八九寺

「川があるなら海もあるでしょうに」

阿良々木

八九寺

「川だーっ！」

「盛り上がり切りません！」

告白

阿良々木

「あ、そう言えば羽川。今思いついたどうでもいいことだけど、告られたことってある？」

羽川翼

「全然さりげなく訊けてないよ」

阿良々木

「あるかないかで答えろ」

羽川翼

「ない」

阿良々木

「……答えてくれるとは思わなかった……」

羽川翼

「困るくらいなら訊かないでねー」

阿良々木

「ごめんなさい……」

掲示板

阿良々木

「テスト終わったあと、上位三十位までの順位表が掲示板に貼り出されたりするじゃん。お前とか羽川とかの名前が、びっとこう掲載されているわけだけど。ああいうのって、やっぱり誇らしいもんなの？」

戦場ヶ原

「少しも誇らしくないと言えば嘘になるけれど、晒し者にされている気分は否めないわね」

阿良々木

「だよなあ。バリッパリの個人情報だもんな」

戦場ヶ原

「九十九問正解したことを知られるより、一問間違えたことを知られることのほうが気になるものよ」

阿良々木

「あー、そういう見方ね」

戦場ヶ原

「羽川さんの成績を見てやる気を出す生徒なんかいるわけないんだから、むしろ下位三十名を貼り出すほうが、よっぽど効果的だと思うけどね」

阿良々木

「厳し過ぎるわ」

買い食い

羽川翼

「買い食いは校則で禁じられています」

阿良々木

「それくらいは見逃して欲しいね」

羽川翼

「より厳密なことを言えば、ファーストフード店や喫茶店に、高校生だけが入るのも校則違反なんだよ」

阿良々木

「何それ？ 育ち盛りの高校生に飢え死にしろって言ってるの？」

羽川翼

「家に帰るまで我慢しなさいよ。家に帰るまでが通常授業だよ」

阿良々木

「うーん」

羽川翼

「大体、阿良々木くんって育ち盛りじゃないよね」

阿良々木

「酷いことを言われた！ しかも羽川さんに！ これは一生立ち直れねえー」

羽川翼

「吸血鬼的な意味合いてだよ」

ストーブ

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

神原駿河

阿良々木

「冬場の教室にはストーブが設置される」

「都会のガッコじゃ、暖房器具と言えばもうエアコンとかなんだろうけどな」

「しかし個人的な話、私はストーブのほうが好きだ」

「確かにあのレトロさはいいよな」

「いや、あの身体が焼ける感じが好きなのだ」

「マゾ過ぎて共感できねえ」

「あ、あ、今、まさに肉が焼けてる！ 焼けてる焼けてる！ 火が通っ

てる！」

「ウェルダンになっちまえ」

体育倉庫

阿良々木

羽川翼

「因縁の場所だな」

「バス」

卒業式

阿良々木

羽川（黒）

阿良々木

羽川（黒）

阿良々木

羽川（黒）

「じゃ、最後は卒業式の話だな。長かったよって短かった。つーか普通にあつという間だったな。どれだけ語っても語り尽くせねーや。百個じゃ全然足んねーよ。しかも卒業かー。羽川と離れ離れかー。やだなー。なんとかして羽川に僕の第二ボタンをもらってもらわないと」

「はあー。人間。相変わらずお前は駄目駄目な奴だにゃー」

「羽川!? いや、ブラック羽川!?」

「にゃおん」

「え? なんて? なんてブラック羽川が降臨しちゃったの? 僕がふざけ過ぎたから? あまりの出番の多さに、羽川さん、怒っちゃったの?」

「にゃんだ、お前、知らにゃかったのか? 百物語はにゃ、百個目の物語を語り終えたら怪異が出現するという、妖怪変化召喚の儀式にゃんだ

阿良々木

ぞ？」

「あ、そうだったんだ」

羽川（黒）

「ごろにゃん。出てきたのが俺でよかったにゃ。お前これ、全盛期の怪異殺しにゃんかが登場してたらどうするつもりだったんにゃ」

阿良々木

「あー。いやでもだからって、お前登場っていうのも、決していいことじゃねえんだけど……」

羽川（黒）

「まー友情出演にゃ。細かいことは気にすんにゃ」

阿良々木

「はあ。ちゃんと帰るんだろうな。僕の羽川、ちゃんと返せよ」

羽川（黒）

「ご主人がいつからお前のものになったんにゃ」

阿良々木

「……あ、でも、だったら猫。折角だし、この百物語はお前のあの名言で締めようぜ」

羽川（黒）

「にゃ？ あの名言とはなんにゃ？」

阿良々木

「あれだよあれ。憶えてない？」

羽川（黒）

「にゃんだ。俺の頭の悪さをいいことに、そんな風にうまく言いくるめて、ご主人の口から卑猥にゃ言葉を言わせまくる気かにゃ」

阿良々木

「やめろ、必死で自制してることを実行していいキツカケを僕に与えるな。なんだよ、本当に忘れちゃってんのかよ。仕方ねえな。じゃあ、わかった。今から僕が言う台詞を復唱してくれ」

羽川（黒）

「にや」

阿良々木

「斜め七十七度の並びで泣く泣くいなくナナハン七台難なく並べて長眺め」

羽川（黒）

「にやにやめにやにやじゆうにやにやどのにやらびでにやくにやくいにやにやくにやにやはんにやにやだいにやんにやくにやらべてにやがにやがめ」

阿良々木

「かーわーいーいー！」

エンディング

合唱『ありがとうさようなら』

本化作業中だったということもあり、阿良々木火憐・阿良々木月火、梅の木二中のファイヤーシスターズの声を担当してくださった喜多村英梨先生と井口裕香先生、お二人のセリフはとても感慨深く聞かせていただいたものです。専門外の仕事と言えば、アニメ版において予告編のシナリオを書かせていただきましたが、そちらを担当してくださったのもこのお二人でした。あわせて御礼申し上げます。本音源はアニメ版とも原作小説とも違う、言うなれば第三セクターという立ち位置となっているため（どちらかと言えばアニメ寄りではありますが）、必然的にアニメ版や原作小説から変化をつけるために吸血鬼・忍野忍には『片言で喋る謎のナレーター』というわけのわからんポジションが振られてしまったわけですけど、その勝負所を平野綾先生が担当してくださったお陰で、このドラマCDはアニメ版とも原作小説とも違う、単独の『物語』として成り立ったと思います。

プロフェッショナルの仕事は美しい。

キャストの皆様の仕事振りには、改めてそんな持論を確信させてもらえました。

また収録現場において、こんな素人脚本家のつたない意見を取り入れてくださった新房昭之監督・鶴岡陽太音響監督の器の大きさには感服するばかりです。この企画を実現させるために陰に陽に東奔西走してくださった若上敦宏プロデューサー、久保田光俊社長にも、同様の感服を。

ジャケットイラストを担当してくださった渡辺明夫先生は（今回に限らずいつだって）発注通りのイラストを発注以上の形で仕上げてくださるので、本当にありがたく思っております。戦場ヶ原、阿良々木、羽川のスリーショットは非常に珍しく新鮮で、また、誰がどんな風に説得して、戦場ヶ原に蟹のコスプレをさせたのかを想像すると楽しいです（私の答は「羽川が脅して」）。

そして最後になりましたが、本音源を一冊の書籍という形で世に出すために骨を折ってくださった講談社、凸版印刷、若林製本工場、ナルシマの皆様に謝意を示して、筆を措こうと思います。

ご清聴ありがとうございました。

西尾 維新

謝 辞

ご存知の通り本音源『偽物語』は個人ではなく複数人による共同制作であり、ゆえに原作小説の作者とは言えあくまでも一参加者に過ぎず、指揮者でも代表者でもない私がいわゆる後書を書く筋はまったくないのですけれど、しかし小説家としての私の将来においてドラマCDのシナリオ執筆というあまりに専門外過ぎるお鉢が回ってくることはもう二度となかろうと予想され、ならばメルクマールとしての意味合いも含め、締めめの挨拶という名目で本音源の制作に携わってくださった皆様に対する感謝の言葉を述べさせてもらおうという魂胆で、ここに後書に代えた文章を書かせていただきたく存じます。

ではまず最初に、キャストの先生方を褒め称えずにはいられません。

門外漢の素人脚本家が何のバランスも考えずに執筆したため七〇分間ほぼおっぱりて喋りっぱなしという無茶なシナリオになってしまったにもかかわらず、それを難なくやり遂げてくださった阿良々木暦役の神谷浩史先生には、ただただひたすらに驚かされてしまいました。逆に学校が舞台という設定上、出どころが非常に限られてしまったことをまるでものともせず、作中において見事な存在感を発揮してくださった忍野メメ役の櫻井孝宏先生の名調子を言い表す言葉はございません。原作者でさえ未だに把握しきれていない戦場ヶ原ひたぎという奇妙なキャラクターを表現してくださった斎藤千和先生の腕は引き込まれるほどに素晴らしかったです。加藤英美里先生の演じる八九寺真宵の声音は、原作小説のセリフをすべて朗読して欲しいとすら思わせる響きでした。尺があることが悔やまれます。神原駿河は本シリーズ内においてもっとも象徴的な登場人物であり、そんな彼女を沢城みゆき先生に演じていただけたことは偽りなく光栄の極みです。言葉少なで声が小さいという千石撫子の性格は決して音源向きではないのでしょうけれど、花澤香菜先生はそんな厄介な彼女にこれ以上ない、比喩を絶する声をあててくださいました。収録の時点ではまだ台本化されていない設定も多数存在し、アフレコ上においては最も障害の多いキャラクターこそ実は羽川翼だったのではないかと個人的に思い込んでいましたが、そんな周辺事情は堀江由衣先生の冴え渡る実力を引き立てる役割しかなかったと言えます。丁度『偽物語』の単行

脚本／西尾維新

Illustration／渡辺明夫

CAST

阿良々木暦 … 神谷浩史
戦場ヶ原ひたぎ … 斎藤千和
八九寺真宵 … 加藤英美里
神原駿河 … 沢城みゆき
千石撫子 … 花澤香菜
羽川翼 … 堀江由衣
忍野メメ … 櫻井孝宏
忍野忍 … 平野綾
阿良々木火憐 … 喜多村英梨
阿良々木月火 … 井口裕香

STAFF

音響制作／楽音舎
音響監督／鶴岡陽太
ピアノ伴奏／菊谷知樹
マスタリング／ソニー・ミュージックスタジオ
マスタリングエンジニア／内藤哲也

Special Thanks to

新房昭之、久保田光俊(シャフト)、岩上敦宏(アニプレックス)、杉山好美(楽音舎)

©西尾維新／講談社・アニプレックス・シャフト

初出 本作品は、書き下ろしです。

にしお いしん
西尾維新

1981年生まれ。第23回メフィスト賞受賞作『ケビキリサイクル』(講談社ノベルス)に始まる『戯言シリーズ』を、2005年に完結。近作に『化物語(上)(下)』『傷物語』『偽物語(上)(下)』『刀語(全12巻)』『真庭語』(講談社BOX)、『零崎曲識の人間人間』『不気味で素朴な囲われたきみとぼくの壊れた世界』(講談社ノベルス)がある。

Illustration

わたなべあき お
渡辺明夫

アニメ『化物語』キャラクターデザイン・総作画監督。代表作に『それゆけ!宇宙戦艦ヤマモト・ヨーコ』『The SoulTaker〜魂狩〜』『ナースウィッチ小麦ちゃんマジカルて』(いずれもキャラクターデザイン)ほか。

JASRAC R-0961376TP

※実際のCDに収録されている音声は、若干シナリオと異なる場合がございます。

講談社BOX

KODANSHA

BOX

オリジナルドラマCD 百物語

ヒャクモノガタリ

価格はケースに表示してあります

2009年7月29日 第1刷発行

にしお いしん
著者 — 西尾維新

© NISIOISIN 2009 Printed in Japan

発行者 — 鈴木 哲

発行所 — 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112-8001

編集部 03-5395-4114

販売部 03-5395-5817

業務部 03-5395-3615



本文データ制作 — KODANSHA BOX DTP Team

印刷所 — 凸版印刷株式会社

製本所 — 株式会社若林製本工場

製函所 — 株式会社ナルシマ

ISBN978-4-06-215369-0 N.D.C.913 142p 19cm

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記の上、小社業務部までにお送り下さい。送料小社負担にてお取り替え致します。

なお、この本についてのお問い合わせは、講談社BOXまでお願い致します。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

西尾維新完全書き下ろし脚本による、超豪華ドラマCD!

脚本/西尾維新 Illustration/渡辺明夫

オリジナルドラマCD 化物語

青春に、まつわる^{ヒトツキ} 伯の物語……。『化物語』キャラクター総出演——西尾維新完全書き下ろし脚本による、全10篇の学園ショートショート! オフィシャルガイドブックに続き、講談社BOXが贈る、西尾維新アニメプロジェクト連動企画第二弾!

人類史上最後の秘話が、いまここに紐解かれる。

文・小仙波貴幸^{こせんばたかゆき} 画・一橋真^{いちはしまこと}

鬼灰買いの佐平治

数えで十七、水の衣を織り成して千歳の綾を解きほぐす

妙なうわさを聞いた。「至恩のはた」を纏うひとたちが、鬼に化けるというのだ。その布はともとてもうつくしくて、まるで……。

——鬼面の紋を背負う者、見るべからず、触れるべからず。これは鬼灰買いの佐平治が、ひとりの人を救う物語であり、女子高生、野々村小箱が、ひとりの友を助く物語であり、悪鬼、改方の長谷川鉄虎が、ひとりの鬼を討つ物語であるという。

——鬼面の紋を背負う者、見るべからず、触れるべからず。……まあひらいてみるとしようか。彼岸にまでとどいてくる話だ、何かあるに違いねえ。

——極彩色泡沫夢幻の鬼物語、灰になるまでお楽しみあれ。

六軒島大量殺人事件、開幕!

竜騎士07 Illustration ともひ

うみねこのなく頃に Episode 1(上)

1986年10月、伊豆諸島に浮かぶ小さな孤島^{六軒島}。年に一度の親族会議のために集まった大富豪“右代宮家”の人々。議題は、余命あとわずかと言われた当主・金藏の遺産問題。互いに腹を探り合う大人たちと、無邪気に再会を喜ぶ子供たち……。だが、台風が近づき不吉な暗雲に六軒島が包まれた時、“ベアトリーチェ”を名乗る者から届いた一通の手紙が、魔女と黄金の“伝説”を蘇らせ、血も凍る惨劇の幕を開ける——。

売り切れの際には、お近くの書店にてご注文ください。